

《研究報告》

## 老年看護学実習における高齢者の生活を支える 看護技術の実施状況および課題

坂 恒彦, 福田 愛子, 池俣 志帆, 粥川 早苗

相山女学園大学看護学部

### 要 旨

【目的】 老年看護学実習における高齢者の生活を支える看護技術の経験および到達度の現状を明らかにし、今後の老年看護学領域における実習、演習や講義等の教育に活かすことを目的とする。

【方法】 「成人老年看護学実習技術経験録」をもとに、高齢者の生活を支える援助の到達度と実施状況について分析した。

【結果】 技術の実施状況の内、実施率が80%以上と高かった項目には「患者の栄養状態のアセスメント」、「患者の食事摂取状況のアセスメント」、「車椅子移送」があった。実施率が20%以下と低かった項目には「経鼻胃チューブからの流動食の注入」、「膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察」、「患者に合わせた便器・尿器を選択したうえでの排泄援助」があった。

【結論】 経管栄養に関する食事援助といった実施率が低かった項目については、学生の理解を高めるため、演習、講義において知識、技術を身につける機会を増やしていく必要がある。

キーワード：老年看護学実習、高齢者、看護技術

### I. 緒言

わが国の高齢化は著しく、平成29年には65歳以上の高齢者が全人口に占める割合は27%を超え、年々増加を示している。また平均寿命も延び、平成28年のデータでは男性で80.98年、女性は87.14年と世界のトップクラスの寿命となっている<sup>1)</sup>。高齢者は加齢に伴い、様々な変化が現れてくる。老年期の特徴として予備力、回復力、防衛力が低下し、健康状態や生活機能が低下するといわれ、高齢者はそれまでの生活習慣を基盤とした疾患が発生しやすい<sup>2)</sup>。65歳以上の高齢者の死因の第一位は悪性新生物であるが、不慮の事故で死に至るケースもある。不慮の事故は75歳以上で著しく高率となり、その中でも転倒・転落は多くみられ<sup>3)</sup>、普段何気なく日常生活を送る中でも危険は潜んでおり、転倒・転落などの不慮の事故により高齢者の健康とQOLを脅かす可能性がある。

近年の看護系人材に対する国民の期待の高まりに応えるには、臨地実習の充実が不可欠である。平成14年の「看護学教育の在り方に関する検討会」<sup>4)</sup>では、学生は臨地実習での看護実践を通じて看護実践能力を育み、それには十分な指導体制と臨地実習の場の確保が必要であるといわれている。また、平成29年の「看護学教育モデル・コア・カリキュラム」<sup>5)</sup>では、学生は看護職として十分な知識と根拠ある看護実践をすることが求められている。老年看護の目標は、健康あ

るいは生活上のリスクの最小化、その人の望む自律的な生き方の実現に貢献することと述べられている<sup>6)</sup>。また、療養生活を送る高齢者にとって食事、排泄、清潔、更衣、移動に関わる日常生活援助は、療養生活を送る高齢者の自己実現を保障する重要な行為<sup>7)</sup>とされ、老年看護学実習は、高齢者の生活を支える看護者の育成に重要な役割があるといえる。

本研究では、「成人老年看護学実習技術経験録」をもとに、高齢者の生活を支える「食事」、「排泄」、「活動・休息」、「清潔・衣生活」、「安全管理」、「安楽確保」の技術に着目し、老年看護学実習における高齢者の生活を支える看護技術の経験および到達度の現状を明らかにする。また、今後の老年看護学領域における実習のみならず、演習や講義等の教育への課題について考察することを目的とする。

## Ⅱ. 研究方法

### 1. 研究対象

研究対象者は、平成28年9月下旬から平成29年6月上旬までの3年次後期から4年次前期までの3週間の老年看護学実習を受講したA大学看護学部102名の「成人老年看護学実習技術経験録」を分析対象とした。また、高齢者の生活支援と安全・安楽の援助を重視し、「食事」、「排泄」、「活動・休息」、「清潔・衣生活」、「安全管理」、「安楽確保」技術の6つの項目と53の技術の種類を分析対象とした。

### 2. 調査方法

#### 1) データ収集方法

A大学の老年看護学実習は3単位の3週間行われ、2週間は病院実習、1週間は介護老人保健施設にて施設実習を行っている。病院実習ではA市内の3つの病院（急性期・慢性期病院）で実習を行い、そこで学生は老年期にある患者を受け持ち、看護過程を展開している。

本研究では、A大学成人看護学実習、老年看護学実習の実習記録の一部である「成人老年看護学実習技術経験録」のデータを分析した。「成人老年看護学実習技術経験録」は、「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会議報告書」<sup>8)</sup>による「看護師教育の技術項目と卒業時の到達度」の技術項目をもとに、A大学看護学部が独自に作成した。「成人老年看護学実習技術経験録」は、合計14大項目、146小項目よりなる記録である。

到達度は、「看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会議報告書」に示された到達度をもとに、技術項目について①学生が単独で実施できる、②教員や看護師の指導・助言のもとに実施できる、③見学した、④知識としてわかる、の4段階の到達度を設定した。到達度の評価は実習終了後に実施し、学生が実習期間中に実施したすべての技術項目に対し自己評価を行っている。それら自記式記載をしたものを回収した。

#### 2) 分析方法

収集したデータはSPSS Ver23を用いて、技術項目ごとの実施率を算出し、記述統計にて分析した。なお、実施率については、①学生が単独で実施できる、②教員や看護師の指導・助言のもとに実施できる、の2項目の割合を合わせ、老年看護学実習において学生が看護技術を実施した割合とし、実施率を算出した。

### 3. 倫理的配慮

本研究は、相山女学園大学看護学部研究倫理審査委員会の承認（承認番号：180）を得て実施した。研究対象者には、研究目的、研究方法、学生の成績や評価に影響がないこと、研究に協力しない場合でも不利益がないことを、口頭及び文書にて説明した。また、得られたデータはコード化し、個人が特定できないように管理をすること等を説明し、同意書の署名をもって、研究への同意とみなすこととした。

## Ⅲ. 結果

研究への同意が得られた102名の「成人老年看護学実習技術経験録」をもとに、高齢者の生活を支える援助技術の中で「食事」、「排泄」、「活動・休息」、「清潔・衣生活」、「安全管理」、「安楽確保」技術の6つの項目と53の技術の種類の実施状況を分析したものを表1に示した。

### 1. 食事の援助技術

食事の援助技術のうち、実施率が最も高かった項目は「患者の栄養状態のアセスメント」（95.1%）で、続いて「患者の食事摂取状況のアセスメント」（91.2%）であった。実施率が低かった項目は「経鼻胃チューブからの流動食の注入」（2.0%）、「患者の疾患に応じた食事内容の指導」（15.7%）、「経管栄養を受けている患者の観察」（17.6%）であった。

### 2. 排泄の援助技術

排泄の援助技術のうち、実施率が最も高かった項目は「患者のおむつ交換」（65.7%）であった。続いて「失禁をしている患者のケア」（44.1%）、「自然な排便を促すための援助」（37.3%）であった。実施率が低かった項目は、「ポータブルトイレでの患者の排泄援助」（7.8%）、「膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察」（10.8%）、「患者に合わせた便器・尿器を選択したうえでの排泄援助」（18.6%）であった。

### 3. 活動・休息の援助技術

活動・休息の援助技術のうち、実施率が最も高かった項目は「車椅子移送」（89.2%）であった。続いて「廃用症候群のリスクをアセスメント」（79.4%）、「患者の機能に合わせてベッドから車椅子への移乗」（64.7%）であった。実施率が低かった項目は、「関節可動域訓練」（2.9%）、「患者をベッドからストレッチャーへ移乗」（12.7%）、「体動制限による苦痛を緩和」（21.6%）、「目的に応じた安静保持の援助」（37.3%）、「廃用症候群の予防のための自動・他動運動」（45.1%）であった。

### 4. 清潔・衣生活の援助技術

清潔・衣生活の援助技術のうち、実施率が最も高かった項目は「患者が身だしなみを整えるための援助」（71.6%）で、続いて「陰部の清潔保持の援助」（65.7%）、「入浴・シャワー浴が生体に及ぼす影響を理解したうえでの、入浴前・中・後の観察」（61.8%）、「清拭援助を通じての患者の観察」（61.8%）であった。実施率が低かった項目は、「臥床患者の洗髪」（13.7%）、「洗髪台での洗髪」（17.6%）、「意識障害のない患者の口腔ケアの計画」（20.6%）、「持続静脈内点滴注射

表1 老年看護学実習における高齢者の生活を支える援助技術の実施率 N = 102

技術項目	技術の種類	実施率 (%)
食事技術	患者の状態に合わせた食事介助	49.0
	患者の食事摂取状況のアセスメント	91.2
	経管栄養を受けている患者の観察	17.6
	患者の栄養状態のアセスメント	95.1
	患者の疾患に応じた食事内容の指導	15.7
	患者の個別性を反映した食生活の改善の計画	16.7
	経鼻胃チューブからの流動食の注入	2.0
	経鼻胃チューブの挿入・確認	3.9
	胃ろうからの流動食の注入	4.9
	胃ろうの状態観察	6.9
	電解質データの基準からの逸脱がわかる	82.4
排泄技術	患者の食生活上の改善点がわかる	43.1
	自然な排便を促すための援助	37.3
	自然な排尿を促すための援助	33.3
	患者に合わせた便器・尿器を選択したうえでの排泄援助	18.6
	膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察	10.8
	ポータブルトイレでの患者の排泄援助	7.8
	患者のおむつ交換	65.7
	失禁をしている患者のケア	44.1
	膀胱留置カテーテルを挿入している患者のカテーテル固定、管理、感染予防の管理	5.9
	導尿または膀胱留置カテーテルの挿入	0.0
	グリセリン浣腸	0.0
	失禁をしている患者の皮膚粘膜の保護	21.6
	基本的な排便の方法、実施上の留意点がわかる	1.0
	ストーマを増設した患者の一般的な生活上の留意点がわかる	0.0
活動・休息技術	車椅子で移送	89.2
	歩行・移動介助	69.6
	廃用症候群のリスクをアセスメント	79.4
	入眠・睡眠を意識した日中の活動の援助	61.8
	患者の睡眠状況をアセスメントし、基本的な入眠を促す援助の計画	37.3
	臥床患者の体位変換	54.9
	患者の機能に合わせてベッドから車いすへの移乗	64.7
	廃用症候群の予防のための自動・他動運動	45.1
	目的に応じた安静保持の援助	37.3
	体動制限による苦痛を緩和	21.6
	患者をベッドからストレッチャーへ移乗	12.7
	患者のストレッチャー移乗	15.7
	関節可動域訓練	2.9
	廃用症候群予防のための呼吸機能を高める援助	10.8
清潔・衣生活技術	入浴・シャワー浴が生体に及ぼす影響を理解したうえでの、入浴前・中・後の観察	61.8
	患者の状態に合わせた足浴・手浴	31.4
	清拭援助を通じての患者の観察	61.8
	洗髪援助を通じての患者の観察	44.1
	口腔ケアを通じての患者の観察	52.0
	患者が身だしなみを整えるための援助	71.6
	持続静脈内点滴注射を実施していない臥床患者の寝衣交換	37.3
	持続静脈内点滴注射実施中の患者の寝衣交換	21.6
	陰部の清潔保持の援助	65.7
	臥床患者の清拭	37.3
	臥床患者以外の清拭	31.4
	臥床患者の洗髪	13.7
	洗髪台での洗髪	17.6
	意識障害のない患者の口腔ケア	20.6
安全管理技術	患者の病態・機能に合わせた口腔ケアの計画	32.4
	インシデント・アクシデントが発生した場合には、速やかに報告できる	17.6
	災害が発生した場合には、指示に従って行動がとれる	7.8
	患者を誤認しないための防止策の実施	62.7
	患者の機能や行動特性に合わせて療養環境を安全に整える	92.2
	患者の機能や行動特性に合わせた転倒・転落・外傷予防	86.3
	放射線暴露の防止のための行動	5.9
安楽確保技術	誤薬防止の手順にそった与薬	2.9
	人体へのリスクの大きい薬剤の暴露の危険性および予防策がわかる	1.0
	患者の状態に合わせた安楽の体位を保持	76.5
	患者の安楽を促進するためのケア	70.6
	患者の精神的安寧を保つための工夫	61.8

注) 網掛した技術の種類の実施目標は「見学」または「知識としてわかる」である



実施中の患者の寝衣交換」(21.6%)、「患者の病態・機能に合わせた口腔ケアの計画」(32.4%)であった。

## 5. 安全管理の援助技術

安全管理技術のうち、実施率が最も高かった項目は「患者の機能や行動特性に合わせて療養環境を安全に整える」(92.2%)で、続いて「患者の機能や行動特性に合わせた転倒・転落・外傷予防」(86.3%)であった。実施率が低かった項目は、「誤薬防止の手順にそった与薬」(2.9%)、「放射線暴露の防止のための行動」(5.9%)、「災害が発生した場合には、指示に従って行動がとれる」(7.8%)であった。

## 6. 安楽確保の援助技術

安楽確保の援助技術のうち、実施率が最も高かった項目は「患者の状態に合わせた安楽の体位を保持」(76.5%)で、続いて「患者の安楽を促進するためのケア」(70.6%)であった。同項目中で最も実施率が低かった項目は、「患者の精神的安寧を保つための工夫」(61.8%)であった。

# IV. 考察

3週間の老年看護学実習において、高齢者の生活を支える援助のうち「食事」、「排泄」、「活動・休息」、「清潔・衣生活」、「安全管理」、「安楽確保」技術の実施状況をもとに、今後の看護学生における教育の課題について考察をする。

## 1. 食事援助技術の実施状況と課題

食事の援助技術のうち、「患者の栄養状態のアセスメント」と「患者の食事摂取状況のアセスメント」の実施率は9割以上であった。疾患の状況によって、栄養量は全身状態と栄養状態の相互に影響する。このため、栄養状態のアセスメントを行うことは、受け持ち患者の疾患、治療の経過をアセスメントする上で必ず行わなければならない。また学生は、食事や栄養が治療と健康回復にとって重要であることを理解しており、実習中に高齢者の観察とデータ収集をしてアセスメントができていた。その要因には、老年看護学演習において、食事支援を課題として演習を展開していたこともあり、学生は食事動作および必要な情報を利用し、患者をアセスメントすることができたと考える。

一方、実施率が低かった項目は、「経鼻胃チューブからの流動食の注入」、「経管栄養を受けている患者の観察」、「患者の疾患に応じた食事内容の指導」であった。他大学における同項目の実施率は3割程度<sup>9)</sup>であり、他大学と比較し、A大学の実施率は、より低いといえる。実施率が低かった要因としては、患者の選定において、臨地実習指導者により重症患者などを除外していることが影響していたと考える。また、胃チューブ等の経管栄養による援助技術は誤嚥のリスクが高く、知識と技術の保証が必要であり、実施することに限界がある。学生は、老年看護学演習において経管栄養に関する演習は実施していないこと、また既習した実習においても実施する機会が少ないことが考えられる。食事指導の実施率が低かった理由としては、学生は、「患者の疾患に応じた食事内容の指導」に関する計画を立案することより、高齢者の長年にわたり送ってきた生活歴を尊重することを優先していたと推測する。経管栄養の技術は、講義や演習において知識、技術

を身につける機会を増やし、学生の理解を高める必要がある。

## 2. 排泄援助技術の実施状況と課題

排泄の援助技術のうち、「患者のおむつ交換」、「失禁をしている患者のケア」の実施率は4～6割であり、「自然な排便を促すための援助」は3割、「患者に合わせた便器・尿器を選択したうえでの排泄援助」は1割の実施率であった。実施率が低かった要因は、受け持ち患者である高齢者の排泄行動の自立度が高く、高齢者の排泄援助の必要性に合わせて援助していたことが考えられる。排泄の援助はきわめてプライベートな行動であり、「恥ずかしい」、「他者に迷惑をかけたくない」<sup>10)</sup>という想いを抱く高齢者は多く、非常に配慮が必要な援助である。また、プライバシーを重視する援助であることと、高齢者の自立性を尊重する行為であるため、見学も困難な状況が推測される。したがって学生の実践力を高めるには、援助の見学や一部実施など、経験する機会の調整を教員が指導者へ積極的に行う必要がある。また「膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察」の援助も1割程度と低い実施率であった。この技術の実施率の低い要因としては、受け持ち患者に膀胱留置カテーテルが挿入されていなかったことが考えられる。したがって、膀胱留置カテーテルを挿入している患者の援助について学習する場面を調整していくことが重要である。

## 3. 活動・休息の援助技術の実施状況と課題

活動・休息の援助技術では「車椅子移送」が最も高く、8割の実施率であった。実施率が高かった要因として、学生は他領域での演習・実習で経験していたり、老年看護学の施設実習において実施していたことが考えられる。これらの経験により「車椅子移送」の実施率が高く現れたと考える。

「廃用症候群のリスクをアセスメント」の実施率は7割強であった。老年看護学の演習では、ペーパーペーシェントを活用して看護過程を展開している。ここでは学生に患者の全身状態とともに生活機能についても着目するよう指導しており、学生は廃用症候群の知識と理解を深められている。その結果、受け持ち患者において廃用症候群の出現の有無および介入が必要な状況であるかをアセスメントしていたと考える。その他で、「体動制限による苦痛を緩和」、「目的に応じた安静保持の援助」、「廃用症候群の予防のための自動・他動運動」の項目は2～4割程度と低い実施率であった。これらの項目の援助が実施できていない学生は、受け持ち患者である高齢者の身体機能が安定して自立性が高かったことにより、学生の介入が少なかったことが理由として考えられる。高齢者に起こりやすい廃用症候群は、関節拘縮や認知機能を低下させる。それは過度な安静により引き起こされ、一度低下した機能の回復には時間を要することから<sup>11)</sup>、高齢者にとって活動・休息のバランスは重要といえる。このことから、学生には日常から廃用症候群の予防の必要性に関する意識を高め、活動と休息に対する実践ができるような教授が必要である。

## 4. 清潔・衣生活の援助技術の実施状況と課題

清潔・衣生活の援助技術のうち、「陰部の清潔保持の援助」、「患者が身だしなみを整えるための援助」、「入浴・シャワー浴が生体に及ぼす影響を理解したうえでの、入浴前・中・後の観察」、「清拭援助を通じての患者の観察」の実施率は6～7割であった。受け持ち患者の特性により、清拭で清潔を保つ場合や、シャワー浴を実施するなど援助の内容は様々である。それぞれ異なっ

た援助技術の学びを学生間で情報を共有させ、知識を習得するよう指導にあたる必要がある。

一方、「意識障害のない患者の口腔ケア」、「患者の病態・機能に合わせた口腔ケアの計画」については、実施率は2～3割であった。実施率が低かった要因は、受け持ち患者である高齢者の自立度が高く、セルフケアが可能であったことや、学生は口腔ケアの援助の重要性に対する意識が低いことが考えられる。それに加え老年看護学演習では、口腔ケアに関する技術を行っていないことが影響していると考えられる。竹田ら<sup>12)</sup>の口腔ケアに焦点を当てた調査では、「高齢者の方の意欲につながる」や、「ケアを通じ人間関係を築けた」、「ケアの意義や効果を考えていなかった」など、口腔ケアの実施により学生の多様な学びが報告されている。よって、口腔ケアは、清潔保持のみならず、高齢者の自立および援助的関係の構築が期待できる援助である。これらを踏まえ、講義や演習において口腔ケアの重要性および高齢者に与える効果を教授する。

## 5. 安全管理の技術の実施状況と課題

安全管理の援助技術の「患者の機能や行動特性に合わせた転倒・転落・外傷予防」の実施率は8割であった。高い実施率であった要因は、講義・演習にて転倒・転落するリスクが高いことや、転倒・転落による弊害について意識づけをしていたことと考える。高齢者は身体機能の低下により転倒・転落を起こしやすい。また、転倒・転落を起こすことで骨折し、歩行や活動に対し消極的になりやすいことで、自立性の維持が困難になる<sup>13)</sup>ことを学生は理解し、活動や歩行時に転倒・転落を起こさないよう実践していたのではないかと推測する。高齢者にとって、転倒・転落により身体面だけでなく、認知面への障害など大きな問題へと繋がることから推測され、転倒・転落の予防は看護者の重要な責務と考える。今後は必要なスケールを活用して転倒・転落リスクをアセスメントし、高齢者の転倒・転落を予防できるよう学生に指導する必要がある。一方、「誤薬防止の手順にそった与薬」、「放射線暴露の防止のための行動」の実施率は1割未満であった。実施率が低かった要因には、看護者による高齢者へ与薬する場面に立ち会う機会が少なかったことや、受け持ち患者への放射線治療が行われていなかったことにより、見学および実施が出来なかったと考えられる。今後は、学生がこれらの実施場面に関われるよう、教員は指導者と調整する必要がある。

## 6. 安楽確保の技術の実施状況と課題

安楽確保の援助技術のうち「患者の精神的安寧を保つための工夫」、「患者の状態に合わせた安楽の体位を保持」、「患者の安楽を促進するためのケア」の実施率は6～7割であった。学生は高齢者の発達課題や背景、身体状況や治療内容を理解し、高齢者のニーズを捉えて実施していたと考える。今後は、安楽や精神的支援の意義について講義等で学ばせていく必要がある。

## V. 研究の限界

今回の調査では、学生による自己評価を基に、各援助項目の実施率を調査した。今後はより信頼性を高めるため、学生に技術到達度評価の意義を周知させ、学生から回答が得られるよう指導が必要である。

## Ⅵ. 結語

1. 実施率が高い項目は、「患者の栄養状態のアセスメント」、「患者の食事摂取状況のアセスメント」、「車椅子搬送」、「患者の機能や行動特性に合わせた転倒・転落・外傷予防」であった。それらの実施率は8～9割であり、「食事」、「活動・休息」、「安全管理」、の技術であることが明らかになった。実施率の高い技術は、講義や演習で既習した項目であり、実習での実施の機会が多いことが示された。

2. 実施率が低い項目は、「経鼻胃チューブからの流動食の注入」、「経鼻胃チューブの挿入・確認」、「膀胱留置カテーテルを挿入している患者の観察」で、実施率は1割未満であった。実施率の低い要因には、受け持ち患者の治療内容や、演習による技術経験の少なさが影響している可能性がある。こうした経験が少ない技術については到達目標を確認し、より知識や実践能力を高めるよう演習を含め、指導・教育する必要がある。

## 文献

- 1) 内閣府, 2018, 高齢社会白書(概要版), (<http://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w-2018/html/gaiyou/index.html> 検索日: 2018年8月30日)
- 2) 島内節, 内田陽子: これからの高齢者看護学, ミネルヴァ書房, 5, 2018
- 3) 厚生労働統計協会, 厚生指標 増刊 国民衛生の動向, 64 (9), 70-71, 2018
- 4) 文部科学省, 2003, 看護学教育の在り方に関する検討会 (<http://www.umin.ac.jp/kango/kyouiku/report.pdf> 検索日: 2018年8月30日)
- 5) 文部科学省, 2017, 看護学教育モデル・コア・カリキュラム ([http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/\\_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885\\_1.pdf](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/koutou/078/gaiyou/_icsFiles/afieldfile/2017/10/31/1397885_1.pdf) 検索日: 2018年8月30日)
- 6) 北川公子: 系統看護学講座 専門分野Ⅱ 老年看護学, 医学書院, 73, 2015
- 7) 大塚真理子, 國澤尚子, 服部都他: 高齢者の看護技術, 医歯薬出版, 3, 2013
- 8) 厚生労働省, 2003, 看護基礎教育における技術教育の在り方に関する検討会 ([https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei\\_127287.html](https://www.mhlw.go.jp/stf/shingi/other-isei_127287.html) 検索日: 2018年10月3日)
- 9) 石川文江, 片野吉子, 源内和子他: 卒業時における看護技術到達度の調査 -看護技術経験リストを用いた自己評価から-, 群馬医療福祉大学紀要, 4, 105-119, 2015
- 10) 前掲載6), 178-179
- 11) 前掲載6), 159-160
- 12) 竹田恵子, 太湯好子, 前崎茂子: 口腔ケアに焦点をあてた老年看護学実習の有用性, 川崎医療福祉学会誌, 3 (1), 25-35, 2003
- 13) 前掲載6), 157-159



## **Achievement and implementation state of nursing skills to support the lives of elderly people in a gerontological nursing clinical practicum**

Tsunehiko Ban, Aiko Fukuta, Shiho Ikemata and Sanae Kayukawa

*Sugiyama Jogakuen University school of Nursing*

### **Abstract**

**[Aim]** To inform educational methods such as the nursing clinical practicum, exercises, and lectures for gerontological nursing students, we aimed to measure the achievement and implementation of nursing skills to support elderly persons in gerontological nursing practice.

**[Methods]** Using nursing skill records during a gerontological nursing clinical practicum, we analyzed the degree of achievement and implementation of several types of assistance for elderly persons.

**[Results]** The implementation rate was 80% or higher for the following skills: assessment of patients' nutritional status, assessment of patients' dietary intake, and wheelchair transfer. The implementation rate was 20% or lower for the skills of injection of fluid food from nasogastric tube, observation of patients while inserting a bladder indwelling catheter, and assistance with urination/excretion by helping patients to use the toilet.

**[Conclusions]** To improve the implementation of skills such as stomach tube and gastrostomy tube assistance, students' understanding must be enhanced by increasing the opportunity to acquire knowledge and skills in nursing exercises and lectures.

**Keywords:** Gerontological nursing clinical practicum, elderly people, nursing skills